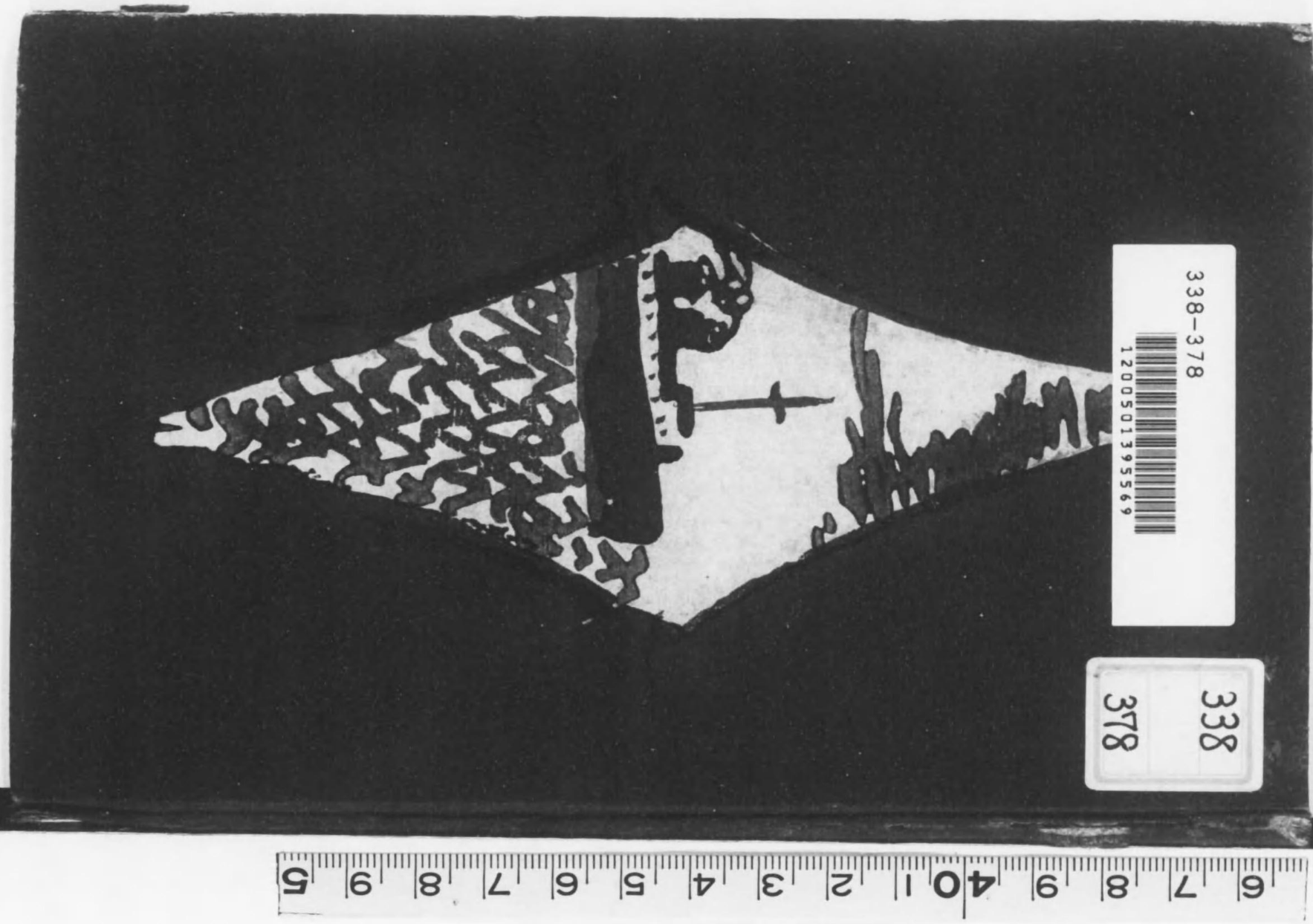

338-378
12005013955 69
338
378

5.1.26
正本

地方史をめぐりて

曉烏敏著

昭和五・三・一
帝國圖書

338378

一。印度の旅

福建沖にて

甲板の籐椅子の上にねころびて波を見ながら人戀ひをるも。（佐渡丸にて）

うつらうつら人戀ひながら椅子によればその人の來るけはひするかな。

しろき齒をあらはにわらひよりて來る波間をふねの靜々とゆく。

みほとけのみ國にむかふ船の中にみほとけのふみをあかずよむかな。

みほとけのみ名をよびつゝみほとけの國にゆかんと船出せしかな。

大正一五・一二・一一

香港にて

はるばると南の國の島に來てめづらしき花をつみあかぬかも。

めづらしき花を封じて故郷の妹に送らんと摘みにけるかな。

一五・一二・一二

南支那海にて

ふるさとの蛙なく夜を思はする潮風にふかれ月を見るかな。

いづくにも陸の見えざる海原を星をたよりに船のはせゆく。

ほのくらき上甲板に獨りたちて帆柱にかかる月を見るかな。

甲板の友の話にややうんでひとり靜かに月の海見る。

まあぢやんやごるふに遊ぶ友をはなれそこはかと
なくもの思ひをる。

一五・一二・一四

海原にくしき雲たつ海原にむくむくとしてくしき
雲わく。

むくむくとくしき雲わく海原の水平線に陽のあか
く出る。

一五・一二・一五

ましろなる湯つぼにひたりすくりうの波をわけゆ
く音を聞くかな。

わだつみをわたるみふねの湯にひたり心しづけく
念佛するかな。

ふるさとにないて別れし人々を思ひふけりて湯に
ひたるかな。

船の湯にふどしを洗ひほほゑまれ旅のおのれをな
つかしむかな。

一五・一二・一七

シンガポールにて

いろいろの裝ひしたるさまざまの國人むるる波止
場に着きぬ。

椰子の樹の葉蔭に月の冴えわたりくさむらに蟲の
ないてをるかな。

海沿ひの椰子の林にまはだかの男女の月をみるか
な。

馬來人の踊をめでて郊外の椰子の林に自動車をか
る。

一五・一二・一八

マラッカ海峽にて

まらつかの海峽をすぐる船の中に師走の月をすず
み見るかな。

ぱぱいやにびいるをくんで甲板にそよ風あびつ海
の月みる。

一五・一二・一九

めづらしき蘭の花をみ葉をながめ南の國にあかず
したしむ。

はるばるとみくにをいでて土となりしはらからの
墓ををろがみまはる。

はらからのみはかををがみ經を誦したけき心のは
らからおもふ。

椰子の樹に椰子の果とりてわがまへに椰子のふとみをささげつるかな。

土人らがかたき椰子の果鉈にわりてもりたる汁をのみにけるかな。

ごむの樹のひろき林をまつすぐに赤土の道をどらいぶするも。

ばなな畑ぱいなつぷるの畑つづくごむの林をぬけいでくれば。

ほりわりの赤土道に陽のひかる熱帶の陽のぎらぎらひかる。

飴牛のふたつ曳きゆく牛車鈴のなる音のゆたかなるかな。

一五・一二・一九

大正天皇崩御

天皇の神さりましししおとづれをききし眞夜中身のうちふるふ。

みたままつる御檀しつらへ香たきて船中のものみなかしこまる。

おんたまの前にかしこみおごそかに涙ぐみつつ經誦しまつる。

異國の人もかしこみ天皇のみたまの前にぬかづけるかな。（以上四首佐渡丸にて）

昭和一・一二・二五

廣庭にみたまのみたなしつらひてここのはらからみなかしこまる。

たまだなの蠟燭の火のしづまりてそよ風たたず虫のなくなり。

みたまおくる樂のしらべか虫なきてやしの葉末に月かたむきぬ。（以上三首コロンボの領事館にて）

コロンボにて

ぎらぎらと熱帶の陽の眞白に流れをる町をそぞろあるきぬ。

海沿のほてるの庭に茶をのめば足元近く栗鼠の遊べり。

ここに來てはじめて眞白のだごば拜みなにとはしらず胸のとどろく。

大なる臥します佛の像を拜みその横に臥すここちせるかな。

有難きみ寺まうでのかへるさに青き陶器の鳩を買ひけり。

一・一二・二六

カンディにて

菩提樹の並木のあひに顏黑きをとこをんなのたたずめるかな。

汽車おりて眞黑の人のひく車にのりてほてるにつきにけるかな。

花もりし小さき籠を子供らに買ひて佛にささげつるかな。

み佛のお齒のをさまるおん寺に胸をどらして詣でつるかな。

老僧のばいたら葉にさらさらと經をしるして見せにけるかな。

老僧に乞うてたら葉の古き經を土產に得てうれしかりけり。

すすめられて象の脊にのり老いたるが子供のやう
によろこべるかな。

二・一二・二七

アヌルダプラにて

菩提樹のみ寺に詣でびるま人にみ佛ほむるうたを
ならへり。

二千年の前にたちたるすつとばのいたくもあれて
草むせるかな。

みをすててみ法傳へしおんみこのみ骨まつれるだ
ごばをがむも。

老僧にもらひし黄色のころもまとひ一日を寺をを
がみまはれり。

一・一二・二九

マヂュラにて

汽車の窓に野猿は入りて殘したるぱんのこぎれを
とりてゆきけり。

一・一二・三一

カルカッタにて

母戀ふる若人にあひ我母を思ひ出でつつ涙ぐまし
も。

お茶漬に青漬胡瓜うまかりき遠き印度の旅の夜更
けて。

ふるるものみな珍らしく五十路越えてこどもの様にはねまはりをる。

冬空の佛の國に旅をして青き胡瓜をくひにけるかな。

あこがれのがんぢす河の水をみて胸のちしほのをどりけるかな。（川原家にて）

二・一・七

ヒマラヤにて

山をうねり山をうねりていや高く雲の中ゆくひまらやの道。

ひまらやの冬の山道わけのぼり吾日の本の桃の花見る。

山の端に杉の木立を見いでてふるさと戀ふる心わきけり。

高くきてしたやまみれば下山は雲にかくれてみえわかぬかも。

とき色の八重の野いばら高山の岨にさきけり雲にぬれつつ。

二・一・九

この花を見ればうれしもこの花のさかりさきけり
この高山に。

高山にのぼりてみれば天の原星のみくらのいや近
きかも。

のぼる日をすぐにみかねて日の光り輝く山をたた
へをるかな。

日のまさにのぼらんとするしののめのそらにさや
けき雪の山々。

あかあかと朝日のぼれば白かりしゆきの山々黄金
いろなす。

あかあかと高嶺をのぼる日の本の國はよきくにわ
があれしくに。

二・一・一〇

耆闍崛山にて

弟子のむれを遠くはなれてみほとけは靜にここに
ましませしかも。

ひとりゐてひとりの底に一切の衆生とともにませ
し君はも。

もろびとのさわぎをはなれ諸人のさわぎを下に見ておはしけむ。

みほとけのひとりおはせしおんあとにひとり靜に經を誦しけり。

經誦して佛思へばみほとけは今も生きまして我にそひます。

むかしここにともにありたる萬二千の友はいづこと念佛するかな。

こつねんと杖によりつつただひとり鷲のみ山をながめをるかな。

二・一・一六

佛陀伽耶にて

このあたりわが釋迦牟尼のさすらひの跡と思へばただなつかしき。

人の子がみ佛となりましませしみくら尊みをろがみまつる。

みさとりのそのおもかげのみづみづしすがたをろがむ菩提樹の葉に。

ぴつぱらの落葉ひろひてみほとけのこころ得しごとよろこびをるも。

日の本のみほとけ慕ふはらからに佛しらすと木の葉おくらん。

二・一・一八

鹿野苑にて

落ちてある古き煉瓦のかけひろひ珠えしごとくよろこべるかも。

昔鹿の住めしとふ丘にみほとけのだめくそとばのそびえをるかな。

たかぶりの五人の比丘がみほとけのみあしの塵をはらへるはここ。

われもまたみあしの塵をはらはんとこの森に來てみほとけを思ふ。

靜かなる光はなちてみほとけは友をたづねてここにきませり。

まはまなの生れし勝地に釋迦牟尼の初轉法輪したまへるかな。

二・一・二〇

恒河にて

名にしおふ恒河の砂をひらはんと船をとどめて洲におりしかな。

がんぢすの水にひたりて男女祈りてをるをふしをがむかな。

がんぢすの清き流に船うけて岸のみ寺の樂の音をきく。

我が骨もここに燒かれてこの水に流れまほしと思ひけるかな。

龍おほく棲むとし聞けるがんぢすに念佛となへて友の游ぐも。

二・一・二一

ベナレスにて

寺のわきの敷石の路次をしづしづと人にまじりて牛もあゆめり。（黄金寺にて）

二・一・二一

佛涅槃地にて

ごねはんのほとけを慕ひ泣きたりし阿難とともに教うけばや。

沙羅の木のもとに布しき安祥に佛この世を去りまししかな。

眼をとぢて臥します佛のみすがたをかうべたれつつをがみけるかな。

常住の法のみくににともにあれどおんかほばせのなつかしまれぬる。

釋迦牟尼は美男にませしあへる人のすべてが愛にときめけるとふ。

草も木もお別れをしみ泣く中を入日のごとく去りましかな。

釋迦牟尼を荼毘しまつりしおんあとの瓦のかけをひらひつるかな。

くしながらの林の木の葉落葉して沙羅の一葉も見えざりしかな。

安祥に涅槃に入りし釋迦牟尼のつきぬいのちに生くるうれしも。

釋迦牟尼よ如來よ佛陀よ智慧の陽よ涅槃の空にとはに輝ります。

草も木もみあとしたひて今もなほ首たれをる涙ぐみつつ。

御涅槃の佛の前にうつふせる阿難に法は生きのこりけり。

沙羅の葉はさゆるぎもせず靜まりて涅槃の佛をみまもりしかな。

二・一・二三

ルンビンデにて

釋迦牟尼の產湯の水の思出の池にうつれるぴつぱらのかげ。

象にのりて菜の花さける野をゆけばはるかにかすむ雪のひまらや。

象の脊に結跏趺座して釋迦牟尼の生れましし日をあこがれをるも。

ぴつぱらの木の下ゆけば葉をかむと駱駝は長き首をあげけり。

象の脊にねぽーる人と座をつらねかびらばすつの跡に詣でぬ。

發掘のぴぷらわの塔のあと訪ひて沙羅の若葉をつみにけるかな。

象を降り積藁の上にやすらひて野にをる猿に菓子をやりけり。

煎餅をつまみてやれば大象は長き鼻のべうけにけるかな。

あさ沼の蘆間の鷺の首あげて象の脊にあるわれを見てあり。

どこをふむもわがみ佛のおんあとと森のあちこちよろこびまはる。

愛らしきまなざしもてる象にのりをさなきかほの釋迦牟尼を思ふ。

釋迦牟尼はかかる廣野にひろびろとこの山あふぎそだちましけん。

るんびにの村の若人と心とけて歌ひあひけり春の一夜を。

二・一・二五

祇園精舍にて

黄金しき買ひて佛にささげたる尊きこの地踏めば
足ふるふ。

舍利弗はよくこそこの地えらびたれ今も心のはる
るこの丘。

み佛のめでて住ませしこの丘に立てばま白に見ゆ
るひまらや。

阿難ここにありたる跡のぴつぱらの老木ときさて
その木に寄りぬ。

この丘に説ける經ぞと阿彌陀經を聲高らかに誦し
にけるかな。

新しくばるまの僧のきざみたる白き佛のみかほな
つかし。

摩登伽の娘に阿難の水乞ひしかげを見まくと池の
邊による。

釋迦牟尼にはしのく王の詣でたる道かとも思ひ麥
畑をゆく。

びつぱらの樹蔭にいこひほろびゆく故國しのべる
釋迦牟尼をおもふ。

古瓦ひらひ草つみ釋迦牟尼のみあしのにほひかが
んとぞする。

いしずゑの煉瓦のまへにたたずみて祇園精舍の草
花をみる。

かねの音の聞こえずなりし寺のあとに立つてひま
らやの雪を見るかな。

二・一・二七

デリーにて

七色の寶の光る湯にひたる三人のささき今はたい
づこ。

赤き色に民の血おもひ青き色に民の息おもふみや
のかざりの。

はしけやしこの宮を見てこの宮をたくみし人をう
まし男とおもふ。

羽ひろげたてる孔雀をきざみある壁を脊にゐし王
のいぢらし。

二・一・二九

エロラにて

しやぼてんの花を手折ると手をふれて小指を棘にさされけるかな。

二・二・五

二。歐羅巴巡り

アラビヤ海にて

はてしれぬ大海原を一すぢの道を求めてわが船はゆく。

けふもまた大海原をあかねさす入陽を追うてわが船はゆく。

大洋を旅する身には朝夕にうつらふ雲のなつかしきかな。

島かげを見ればうれしも木のかげを見ればうれしも船に日を經て。

晝は雲をあかずながめつ夜は星をつくづくと見る海の旅かな。

洋をゆく船にたたずみ島かげを見ればうれしもよびかけて見る。

親も子も國に殘してにこやかにいづこにゆくかこの若人は。

二・三・一

ゼルサレムにて

げつせねまのその訪へば老僧の香のあるすみれをつみてくれけり。

律僧のつみてくれたる花菫嗅ぎていえすを偲びけるかな。

おりいぶの老木の下に花をつむ黑衣の僧のやさしおもざし。

そろもんの榮華のなごりの町に來て野にさけびたる人を思ふかな。

二・三・一一

ナザレにて

自動車の休らへるひまに野をあるき草花多くつみにけるかな。

白き花紫の花黄なる花赤き花をもつみにけるかな。

つみし花皆珍らしく家づとに日記の中にはさみけるかな。

麥畑のくろの草花珍らしく雲雀ににたる鳥もなきをり。

荷をつんで道ゆく駱駝の鈴の音ののどかにひびく春の風かな。

二・三・一三

タイベリヤにて

野にさけるあねもねの花をつみながらひやしんすさく庭のしのばゆ。

湖の面は鏡の如く波たたず靜かに月のかがやきをるも。

月かげをながめゐしままに心すみてさざめく音のいとをしくなりぬ。

月かげに心清けくすみければ酒ばをいでてひとり
あるきぬ。

夜ふけてべらんだにたち湖の面の月みてあれば庭
に蟲なく。

湖にそひ花あまた咲くみどり野を心涼しく走りけ
るかな。

うつくしきぺるしや毛せんの繪のごとき花野をゆ
けば雲雀なくなり。

その昔いえすもここに花をつみ湖をながめて物思
ひけめ。

車とめていろいろの花をとらしめし中に榮ある赤
きあねもね。

牛はなつだんだら坂の湖の邊のみどりの原にあね
もねのさく。

にこやかにわれをむかへし老僧のこの古寺にひと
りすむとふ。

うつくしきそらに日のてりなつかしき野邊に花さ
くまだ死なれざり。

たいべりやのわき湯に入ればむくつけきあらぶの
男子ながしくれけり。

いえすここにいりて祈りし湯にこそとわれもひた
りぬ清きわき湯に。

二・三・一四

ハイファにて

はるばると人を尋ねて人あらず家をめぐりて花つ
みてくる。（藤田氏に）

二・三・一四

エジプトにて

いにしへの人の心のおほいなるたくみの前に小さ
き我を見る。

土人等が人形を買へと寄りて來るらくだにのりし
われを目がけて。

はぴるすの小切れを買うてとことはの命にふれし
心地するかな。

ぴらみつどは大いなるかなこをたてしえじぷと人
は大いなるかな。

すふいんくすの前にたたずみはるばると連る砂漠をめづらしみ見る。

人に見するとぴらみつどの上に猿の如く肌黒き人のはせのぼりけり。

二・三・一五

アテネのアクロポリスにて

そくらてすもいくたびかこのみ柱によりたるらんと我もよるかな。

二・三・二二

コリントにて

白馬に赤き鞍おきゆるやかにわかき女にくちとらしめぬ。

馬にのり花の春山のぼりゆくはるかの下に海を見ながら。

大いなる石の柱の殘りある廢墟をめぐり花をつみけり。

二・三・二三

コンスタンチノープルにて

だあだねるすの古砲臺の青草にいこひてあれば龜の這ひ來る。

外國に旅する身には這ひ出でし龜にも物言ふ心地するかな。

とるこ湯に案内せられてとるこ人のゆたけき心味
へるかな。

いすらむの御寺に詣でとるこ人の尊む心見ればう
れしも。

古のみ寺のあとに人殺すあまたの武器のならべあ
るかな。

古の牢屋のあとの穴藏に入れば身の毛のいよだて
るかな。

地の下に廣き室ありその室に水のみてるに舟うけ
てあり。

古の王の榮華の跡とめてこはれかかりし古寺あは
れ。

酒店に入れば人達はうれしげに水煙草のんでいこ
ひをるかな。

手をつなぎとるこ男のをどりをる踊場にしばし入
りて見るかな。

二・三・二九

ドナウ河にて

白樺の木の間をもれてほの見ゆるどなうの河をゆきする舟。

どなう河の岸の青柳芽をふきて小さき舟の乗りすてあり。

どなう河の岸邊の丘の青草の中にま白き鳥の遊べり。

二・四・一

ウキンにて

ベーとうべんの音樂きくと道遠くうゐんの町を訪れしかな。

しうべるとの家をたづねて彼の寄りし椅子によりつつ彼をしのびぬ。

ベーとうべんの住みける家をあちこちとめぐればどこも貧しげなりし。

うゐん人は心やさしく物を賣る店の女もなつかしきかな。

共に汽車に乗りし踊り子に日の本の歌かきやればうれしと言へり。

べーとうべんのみ墓をがめば樂の音の聞こゆるごとく心すみけり。

英國の人のささげし美しき花輪のばらのにほひをるかな。

二・四・三

ゆくりなくふえでりおのおぺら見て天地の氣にふれにけるかな。

ヴェニチヤにて

夜遲くごんどらにのつて宿につく道にききけり舟の上のうた。

二・四・六

ローマにて

寺々に神はいまさずかへるさに少女ゆ買ひしこのすみれにぞ。

二・四・一〇

アッシジにて

古のひじりのみ墓訪れて青草山に花をつむかな。

青草の中にまじりてほほゑめるうす紫のあねもねの花。

二・四・一三

フィレンチエにて

しくもあの並木の道に馬車かりて春を訪ねて遊びけるかな。

二・四・一四

アルプスを見て

あるぷすの白雪見つつ若芽ふく峠をこえてふらんすに入る。

日をうけて白く光れるあるぷすを手をかざしつつながめつるかな。

あるぷすの雪のしづくのながれ出る川つら青く光りをるかな。

銀のごと日にかがやけるあるぷすをながめてあればば胸のさやけき。

利鎌もてけづれるごとき岩山に利鎌のごとく雪のつもれり。

二・四・一六

リオンにて

木芽たつ林をあるき池の面の小舟の人と語りつるかな。

日の本の日の子をめづるむくいにて老を知らざる人に幸あれ。

新緑の林をあるきさわやかに法の理かたりつるかな。

二・五・四

みづみづし若葉の町をぬひながら二つの川の流れをるかな。

子のために友のかひたる車みて子のなきわれをさみしまれぬる。

二・五・五

ゼネブにて

小雨ふる木の間の家のくれ近みこころ靜かに湖の面を見る。

雨ふりてみどりいやます木の間よりぴあのの音のきこえくるかな。

いろいろの小鳥のうたにききほれて若葉の茂る家にをるかな。

二・五・六

まろにえのわかばにさける白き花さやかに光る湖沿の道。

暮近き湖にうかべる白き鳥その白き鳥さゆるぎもせず。（笠間家にて）

二・五・八

ベルリンにて

みづみづしりんでんの葉に痛ましやけふも冷たき
雨のそぼふる。

二・五・二三

ワイマルにて

大いなる木の下かげの苔の岩にこしうちかけて鳥
の音をきく。

花つみてひとり靜かに遊びをれば小鳥もわれによ
りてとびをり。

みづみづし若葉の森をさすらひて心ゆくまで人を
偲びぬ。

いろいろの思ひにふけり詩人のあるきし森をなつ
かしむかな。

老木しげる森をしづかに流れをる川に丸木の橋の
かかれり。

そのむかしわが詩人のこの橋によりけんものとわ
れもよるかな。

木のかげに歌かきをれば小さき鳥のわが足のへに
とび遊びけり。

異國の旅を思はずただひとり心ゆたかに森をさすらふ。

森にきて小鳥のうたに耳すます器械のきしる音をさけつつ。

岩あひを落つる清水の音さゆる老木の森のまひる靜けき。

げーての心のごとくとき色の牡丹の花のゆたかにさけり。

記念にと牡丹の花の花びらを乞うてはさみぬ繪葉書のあひに。（以上二首ゲーテの家にて）　二・五・二五

ウキスバーデンにて

りんでんの並木の町のいとすぐに見はてぬまでに長くつづけり。

とのごとく磨きあげたるしき石の道にりんでんの若葉おちあり。　二・五・二六

ライン川にて

雪解にささにごりせるらいん川泡だちながらに疾く流るる。

いさましき青葉若葉の山あひをいそいそとして水の流るる。

初雪のらいんの川の船の中に人あまたのりてさんざめくかな。

わが横にありたる老人のなき母に似てありければ懐かしみけり。

二・五・二七

バリにて

池の邊の芝生にいこひ日に光る若葉の森をあかず見てあり。

木の芽たつさんぜるぜの町をあるきうつくしき人を見いでつるかな。

二・六・一

シベリヤにて

行けど行けど青原ばかり七日あまり汽車の走れど青原ばかり。

汽車を降りて停車場に近き小舍によりすらぶ女ゆ蜜を買ひけり。

見はるかす青草原にいろいろの赤き花咲くかあぺつとのごと。

めづらしきおろらの光ながめつつしべりやに來し
甲斐ありと思ふ。

汽車の窓にいろいろの百合の花たばをすらぶ娘の
賣りに來るかな。

花うりのすらぶ娘に手まねして語りて旅のうさば
らしすも。

ばいかるの湖邊の山にたどりつき山めづらしと見
やりつるかな。

二・七・三

三。休む日のなき

北安田にて

おろかしきおもひとしれどさらさらと流しもやれ
ずわづらひをるも。

すみわたるあきのみそらに一ひらの雲のひねもす
消えやらぬかな。

あまり事のしげくなりくればすべてそをのがれい
でんと願ふ日のあり。

まさに死にのぞまんとする友の横に死を恐れざる
おもひかたりぬ。

世のすべてすてし靜けさうれしければ死をおもひ
みてほほゑまれぬる。

向日葵のたね黑ばめる庭のあさつゆにぬれつつ虫
の音きくも。

子のよめをむかへしことのうれしさにのめざる酒
をのみあかしけり。

けふもまたものをもてきて願はくばゆるしうけま
せとなける人はも。

うまいものの捧げたきことの耻かしく思ひしりつ
つけふももてりとふ。

みほとけにものをささぐるおもひして村人われに
よりてくるかな。

いろいろの供養ささぐと村人のおろかなる身によ
りてくるかな。

勿體なき思ひになみだたたへつつだまりて供物うけてをるかな。

こほろぎは湯殿のわきのまきの中に夜毎なきけりすずしき聲に。

青き野は黄色にかはり松の葉の黒くよそひて秋の來にけり。

よき人にあひやもするとあてもなきねがひいだきてあるきまはりぬ。

雨のふるほどにもあらずされば日かげもてらぬ日のつづくかな。

その人を念じてあればわが心若くかがやき身のほとるかな。

早稲の香の高き村道ゆきかへり村居よろこぶわれは土の子。

めぐりきし國々おもひ人おもひひとりほほゑむ秋の夜半かな。

庭になくこほろぎの音にききほれて異國の樂をおもひをるかな。

はなしつつ道を教へしべるりんの少女のあつき手をおもふかな。

象にのりてかびらばすつを見舞ひたるひろきねぽるの野をおもふかな。

人にあひてさだかにかほを見えわかぬうすき眼をもつわれをはかなむ。

年わかき男女の誰みても吾子にあひたる心してあり。

うるさしと思ひすてたる人の世に人なつかしき秋の夜半かな。

そのままに消えざる雲かそらおひて雨よぶ雲か一ひらの雲。

遠き旅ゆ家にかへりて休らひの一日ももたぬわれにもあるかな。

休らひの日をもたぬわれは貧しとも亦とめりとも
おもはるるかな。

ともかくも人々の愛にほだされて休むひまなきわ
れにもあるか。

もたらせる尊き書をひもとかん時ももたざりこの
秋の夜に。

休らひの日をもとめつつ休らひの時をもたざり人
を愛でつつ。

けがれたるこの身なれどもみ心にかなはば何事に
もつかはせたまへ。

男五十女に心亂れねば事をなすによしと友のいひ
けり。

男五十女に心亂れずと友の言葉にひたと合はざ
り。

みほとけはかはゆきわれをいとをしむ正しき道を
われに教へぬ。

みほとけの仰せかしこみしとやかに道をゆかんと
ねがひをるかな。

特更に生をねがはず特更に死をもねがはずにただ
このままに。

よせてくる業の荒波おそれざる靜けき心たまはり
しかな。

人をたづねうまひする日ももたぬわれをおろかし
とおもふ時もあるかな。

二・九・七

東京松谷家にて

生もよし死もまたよろしなごやかに秋去りくれば
空の色みる。

あさまだき念佛しつつあき晴のみ寺の庭をあるき
まはりぬ。

八月の十五夜の月のさやかなる庭に椅子おきかた
り更しぬ。

二・九・一一

中野岡本邸にて

すみわたる早秋のそらに日の照りてさくら落葉の
庭にをどれり。

ちやきちやきとはさみの音のきこえ來る早秋の風に肌ふかすも。

二つ三つ飛行機うなりとびすぐる秋のみそらに雲もはしれり。

すみわたる秋のみそらにふはりふはりただよふ雲をなつかしくみる。

樂堂のこうらすよりも虫の音のうれしくなれり老いにけらしも。

簾うごく風なつかしみ縁にたてば殘暑のにはにとかげ遊べり。

二・九・一一

仙臺伊澤氏邸にて

虫の音に更けゆくいほに遠寺の鐘の音きこゆいや靜なり。

二・九・一三

淨法寺より伊澤氏に

朝まだき佛前にすわり經をよむ君がすがたの忘られなくに。

秋雨の停車場にわが手とりましし和やかのおもを念じをるかな。

二・九・一五

淨法寺小田島家にて

雨あがり庭に出れば初たけの青草の中に靜まりをるも。

草にしやがみはつたけに手をふれてみるあさ日さやけき秋晴の庭。

鉢うゑの鈴蘭の實にみいりつつさりにし人の眼を思ふかな。

みほとけの尊きみかほ念じつつ稻の香のする國々めぐる。

ほし萩の香をなつかしみ野の道に足をとめけりほし萩の下。

うごき出せし入齒氣になり人とあひていつしかだまりがちになるかな。

舌の先にうごく入齒をなぶりつつすべてを忘れをる時のある哉。

庭を覆ふ欅の大木にさわさわとけふも風ふき日のくれんとす。

二・九・一五

北福岡にて

夜もすがら日ねもすたえず川の瀬の叫んで進むやすらひもせで。

川向の山に出る日のあかあかとわがをる樓を照しつるかな。

川の瀬に白き泡たてその泡のしばし流れて消えてゆくなり。

二・九・一七

盛岡にて

はだ寒く秋雨のふりしきる朝たばこふかして靜まりをるも。

木彫の金山踊かざりある新築の部屋に請ぜられけり。

靜なる時をよろこぶこのごろのわれにうれしき秋雨のあさ。

やむ友の心にかかり人達の集ひにまじり默りがちなる。

やみし妻のすこやかになりしよろこびに歌あまた得つと友のいひけり。

いただける西洋梨の皮とればなさけの汁のうでにたれけり。

秋雨にしめりがちなる旅衣君が手によりたたまれにけり。（善波君に）

異國を默々と一日歩きたる夜のねむりの安かりしかな。

二・九・一八

大澤温泉にて

門を入ればさくらもみぢのはらはらと夕べの風にまうてをるかな。

温泉を出でてまつさあじしてもらひつつやすきねむりに入りにける哉。

二・九・一九

本莊にて

人去りて靜になりし旅の宿にひとり虫の音きいてねるかな。

何事を思ひわづらふいけ花のだりやの花の首かたむけぬ。

緋だりやの花のま中の大いなる黄色のしんの光りをるかな。

二・九・二一

鍋岡にて

友の死のしらせを得たる旅のやどに虫のなく音を
悲しくきくも。

二・九・二二

京の驛にて葡萄をくれし相良靜枝子に

大つぶのあまきぶだうの汁すひて京のみ寺の人を
偲ぶも。

二・一〇・三

刈田にて

少女子があみてくれたるふみ栞この桃色のふみ栞
はも。

二・一〇・五

福岡にて

若き子のおもかげしのび若き子のこころよろこび
秋の旅する。

二・一〇・八

木屋にて

べこにやのふと葉のぢくのふとぶととふとるを見
れば心ふとるも。

二・一〇・一三

大牟田にて

庭の隅の里芋畑にきよろきよろと虫のなきをり秋
の日のてる。

人を愛づる心あらずば人の世のいやすがすがしく
もあらましものを。

けたたましき鳩の羽音にめさむれば窓白々としら
みそめけり。

さめてねむりねむりてはさめやすらひてひるすぐるまで床をいでざり。

二・一〇・一五

熊本にて

生と死のうねりをなしてとことはのいのちの水の流れゆくなり。

そら見んと障子あくれば秋風の揮毫の紙をふきとばしけり。

さわやかに晴れたみ空に一抹の雲うつくしくまうてをるかな。

海ゆたか鯛のふとりて餌くはず恵比須日ねもすあくびしてあり。（恵比須と鯛の畫に題して）

二・一〇・一八

庭つくり庭をつくるとこすもすをむごたらしくもこぎたふしけり。

庭畑のあなたのやぶのこかげよりそうけいらぬかと叫びけるかな。

日かげあび縁先にねて庭見れば顔赤らめて葉鶏頭たてり。

すきかへす土のにほひをなつかしみ縁にねころび
日をあびてあり。

黄なる蝶ましろの蝶もふはりふはり小春の園にま
うてをる哉。

秋三夜心ゆくまで語らひてすがすがしくもなりに
けるかな。（以上六首稲本邸にて）

二・一〇・一九

八代にて

雨もりにいただける短冊ぬれたりと請へるかはゆ
くまたかいてやる。

二・一〇・二〇

人吉にて

酒に酔ひて聾者の叫ぶ聲々にすこしのむだのなき
を喜ぶ。

久しぶりにひとりおかれしよろこびにたそがるる
山をあかず見てあり。

人さりて靜になりし縁端に川のあなたに沈む陽を
みる。

たそがれのうすもやかかる川面をしづかにわたる
鐘の音かな。

この秋のわれを思へばはりのなくあまりにまるし
どんよりとして。

すててみても捨ててみてもなほ殘りたる命のやり
ば見いでかねつも。

女難あるおん顏なれど老いませば心やすしといふ
を笑みきく。

二・一〇・二〇

志布志にて

けふもまた文の來らず秋の日のあわただしくも暮
れてゆくかな。

はるばると汐路をこえてこの濱の法の集ひに入り
し君はも。（澤田大助君に）

のこりたる執の重荷に死の坂をあへぎ越えゆく人
を見るかな。

ただくしきえにしとばかりただくしきえにしとば
かり尊まれぬる。

少女子の請ふにまかせてただふたり中庭にたちて
寫眞とりけり。

親も子も不景氣といふ言葉さへ知らぬといへるくしき家あり。（片平氏に）

あまり多く金をたむるな金の爲に落つる地獄をいみ恐れつつ。

はるばると四里の山越え同行の生椎茸をもちて來にけり。

あたたかきねるの衣地にあたたかき心味ふ秋の夜半かな。

法緣の後に殘りし人達のさくさく柿をたべる夜半かな。

默々と働く人のものいひのたくみならねど味ひのあり。

まはだしに石のながしに働きてわれに馳走をする人うれしむ。

力づよくあれよやまとの女達伊勢のみ神は女神におはす。

うらわかき涙をそそる秋の夜の別れの宴の三味線の音。

はりつめしのぞみはたせしこの秋の心まどかに愚に似たり。

二・一〇・二八

知覽にて

さのさぶし若い聲してうたひけり四十女の三味をひきつつ。

遠近ににはとりないてしろじろとあけゆく庭に虫のすだけり。

海なぎて波もきこえずくくとなく鳩にしろじろ夜のあけてゆく。

まちわびし文はきたれりそのふみに文まちわぶとかいてあるかな。

二・一〇・二九

菊永にて

日あたりの縁先にでて娘子に灸させながら秋の風見る。

秋庭に竹の若竹親竹をしのぎてたてりそらすみわたる。

ひたすらに人なつかしく誰見ても手をにぎりたし
この秋の旅。

ほらの音の村にひびきて秋の日のうらさびしくも
暮れてゆくかな。

豚小舎の前のさ庭にしつらへる湯にひたりつつ畑
の虫きく。

樫の木の上にさえをる月あびてこころさやかに湯
にひたるかな。

いきりたつ燒芋を手にし皮むきていきりの中に母
の顏みる。

この村に來て里芋をまぜたきし粟飯をうまくたべ
にけるかな。

二・一〇・三〇

伊牟禮にて

菊の花をいけたるへやにひそやかに語る一日もう
れしかりけり。

庭にいでて手づからみかんの黃ばめるを幼ごころ
にちぎりたるかな。

二・二一・一

鹿児島にて

神と共に生きたる人のみすがたを神々しくも拜まるるかな。（南洲翁の繪に題して）

惜しからぬ命ながらへこの秋もまたすむ月をながめつるかな。

み佛のくにに埋めんとせしむくろいづこの土にうめんとはする。

二・一一・六

糸魚川にて

南國の波の音しのび北國の雨の海邊をさすらひをるも。

二・一一・一五

新潟にて

ひざに手をきちんとおきておごそかに戀のなやみをうんうんとなく。

しとしとふる雨の音をききながら炬燵にもぐりあさねするかな。

野分晴れあさの庭面にちりしける楓のもみぢ掃かんにをしき。

そびえたる浮世の波をこえてゆく心いだきて念佛するかな。

落葉はく箒の音のさわやかに晴れたるあさの庭に
ひびくも。

わが前にすわる二人はもの言はずためいきばかり
もらしをるかな。

卓の上の一重の菊のほのしろく夕べの室ににほひ
をるかな。

みづからの愚さ教へたまひたる智慧の光ををがみ
つるかな。

今の世のまた次の世の何事もいのる事なく念佛す
るかな。

おろかなる人はおのれのおろかさに氣付かで世を
ばうらみをるかな。

ゆくりなく二つの泡の相よりて一つとなりて流れ
をるかな。

二・一一・一六

新發田にて

六人の子等も目さまし顔ならべ夜半のまとゐの中
にゐならぶ。

宴をはり家に歸りてさはし柿くうてかたらふ更く
る忘れて。

二・一一・一九

暮の歌

古井願力寺後室義母山田つや子法名溫良院釋尼慈香禪尼十二月五日にみまかりたまふ。享年六十五歳。長男山田采圓、次男佐々木月樵二君往き、長女かす子、次女房子、三女尙子相次いで往き、今次三男友山君の殘れるのみ。予が生みのははゆき、ははとよびうるうれしさのその母上も往きたまひけり。

なきつまの病をともにみとりせしなつかしのはは
は往きたまひけり。

親しげに村の媼がなき母の白毛まじりの髪をそり
けり。

すなほなるみ姿おもふひたすらに子をいつくしめ
るみ姿おもふ。

かみそれば若きひじりのかんばせにたるみかほ
になりましかな。

二・一二・六

○

みぞれふる夕の庭の軒近み雀あはれにないてをる
かな。

やどるべき巣をかたらふか雀子の夕の庭にないて
をるかな。

子供らは雪をよろこび雪ふれば家にゐつかず外あそびすも。

二・一二・七

めづらしくうすらきゆける雪くものかいまかいまに青そらみゆも。

雪雲はいつしかきえてうらうらと冬のみそらに日のかがやけり。

事多き年なりしかど日記には今年は無事と書きたりしかな。

一日だにやみていねざりし一年をわがかへりみてことほぎをるも。

年くれのせはしき中に春もまたで人の往きけりあわただしげに。

すこやかにいねたる人のあさ床をいでずそのまま死にてゐたりとふ。

きのふその人のうはさをしたりしにけさは往きしとしらせこしけり。

往く人をなつかしと思ひ往く人をよきことしつとも思ひをるかな。

したき事はさはにあれどもいま往くもさのみこの世に心のこらず。

なつかしき人になごりのつきざれど死もまたすずしと思はるるかな。

もの多くくはずなりけるこのごろのわがもものしやせにけるかな。

ともかうも思ひをりつつわがあしはいつしか願ふ方にむきをり。

もちつきのあしらへすると家人のはたらく中をわれはぬけきし。

家人のはたらく中をぬけいでてはたらくさきに心ひかるも。

久しぶりに友訪へば友のつまのくしき聲聞く齒のぬけしとふ。

冬になれば雪は來にけり年毎のためしわすれぬみ
使のごと。

いつ雪の來るもよしと木のなべて身つくろひせる
庭のりりしき。

冬枯の雜木林に松の木の雨にぬれつつひいでをる
かな。

雪になろか雨にならうか晴れようかと思ひなやめ
る晝くらき空。

二・一二・二六

四。鏡　餅

元　旦

雪の上に初日きらきらかがやきて昭和三年は來り
けるかな。

雪をわけて學校の年賀にまうづるを寒しとおぢず
五十二の春。

爐のふちに家人集ひかりそめに辻占ひらきてさざ
めけるかな。

ソクラテスの胸像の前に鏡餅供へてうれしこの元旦の。

子供らと聲はり上げて君が代をうたひけるかなとそのきげんに。

靜かなる雪つむ村の元旦を人戀ひながら字をかきをるも。

ゆきの上に日のかがやきて折々にあをぞら見ゆる元日の晝。

本堂の白壁に冬の陽のてりて松が枝わたり雀なき をり。

三・一・一

涅槃會をするとて

大法のとはのいのちをことほぐと涅槃の御忌に友まねきけり。

三・二・一五

病床にて

到來の島大根のふろふきに始めてかゆに口づきしかな。

やみつきて十日目の宵島大根のふろふき食ふと床に坐れり。

汁ばかりたうべ居にしを病ひややいえて今宵はかゆを食ひけり。

病の苦のはげしき極みおろおろと聲たてて泣けり幼子のごと。

病みてねればすべてのたくみくだかれて生れ子のごと手足動かす。

三・二・二五

めざめては枕邊にある白桃の花に見入りて母をし思ふ。

やみてあれば春日うらうらおとづれていろいろの鳥の庭に來うたふ。

いとわづか日々に病のうすらぎていろいろの欲のきざし來るかな。

枕邊にかざるなすびの紫に南をしのぶ雪の國にやみ。

三・二・二八

障子あけてうらうらとてる春の陽をあかずみてあり病の床に。

三・三・一

あめりかゆわざわざ來つる客人のちゆうりつぷの花をささげたびけり。

枕邊のちゆうりつぷの花に見入りつつ病みつるわれを思ひをるかな。

いろいろのちゆうりつぷの花の色めでて早春の室に病わするる。

わざと灯をつけず夕の村の家のわら打つ音をきいてをるかな。

三・三・四

思ひかけぬ珍らしき客人相つぎて訪ねしくれば病みも憂からず。

待ちし人來てたのもしく待たぬ人の來てまたうれし病みの幸かな。

人は死に世はかはりゆく變りゆく世にある我のかはらざらめや。

病やや癒ゆれば仕事のことなんど床にゐながら思ひせはしき。

雪ふりて小暗き冬の日暮れ時子守のうたのあはれなるかな。

病みてゐるいろいろの幸の中にして靜かに我を思ふ幸もよ。

仕事とふ何をも爲さで久に病みものに足りあふ我が幸思ふ。

病みゐつつ靜かにねるに堪へずして働く人のあはれなるかな。

まさかりに梅咲くに雪のふりしきるつれなき世ぞも何のさとしか。

雪の中を日毎くすしの見舞くる何とは無しにそを待たれぬる。

三・三・六

身ぬち冷え夜具引きかむり足にゆば手にひびつだきてうづくまるかな。

吹雪あれ夜すがらやまずかたことと戸の動ぐ音にやすくねむれず。

村人が白南天の實をせんじのめといふがにのめば
よろしも。

二十日餘りへちまの汁をのみをれどせきは出やま
ずたんもえきれず。

おそろしき夢ゆさむればつづけさまにせきのまく
れてたんのいでけり。　三・三・七

くるしとてもがけばいよよ苦しければはらに手を
おきしづまりをるも。

あきらめてしづまりをればくるしさはいつかよそ
ごとのやうに思はる。　三・三・八

いねてあれば熱き涙のわけなしにほろほろ頰をつ
たふ朝なり。

みとりする妹が齒痛み泣きながらみとりをすれば
心くらしも。

しづまりて吾をかへりみる時を得て病の幸を思ひ
をるかな。　三・三・九

外つ國ゆ書の百卷とどきしも病みてしあればせんすべもなし。

たんはくと床に起きかへり枕邊に高く積みたる書を見やりぬ。

ぬかるみの雨の野を越えうつくしき鹿の子椿を持てまゐりけり。

病やや癒えければ床に起きなほり髪からせけり氣のかはるらめと。

かねてわが好みをしりて珍らしきえびをたづさへ見舞來にけり。

三・三・一〇

せきしきる吾が聲ひびきうらがなし家ぬちなべてしづまる夜半に。

むろざきのちうりつぷの花の力なげにさむさにしをれ枕邊にあり。

村の子のてまりの歌を聞くなべに幼かりし日の思はるるかな。

やみて久に庭の木梢にうぐひすのなくまてる間に
今朝も來らず。

まよひてかさむさおぢてかうぐひすの今朝も來ら
ずうらうらてるに。

三・三・一一

病いえて床をいでたる喜びにまづまうでけりたら
ちねの墓。

三・三・一六

冬ぬちのいましめの繩をときやれば庭木は春日あ
びてをどれり。

床をいでし嬉しさに庭をまはりゐて又うすかぜを
引きそへしかな。

やへの黄の水仙の花の高き香のこもれる部屋に歌
きはめすも。

雪垣をとりやりしかに今宵こそ庭木は足手のべて
やすまむ。

三・三・一七

五。青葉若葉

福井にて

雪解の庭にちらばるちりをはきしづこころして花をまつかな。

ひとりゐの靜かさの中にひたりつつものみなたらふここちしてあり。

死にちかきやまひのいえてきし友の肥えたるをみてはるあたらしき。

そばに來ぬ人にはうたをかいてやるこころになれずなつかしければ。

人の世のつめたきそこをほりぬきてあつきこころにふれにけるかな。

そばにをる人の羽織をぬぎけるにあたたかき日とたしかめられき。

三・四・三

大阪にて

別れには悲しかりしも別れ來れば身がるになりし心地するかな。

二人のみあれば互に足らひてか言葉すくなに靜まりをるも。

むねのうちにあらたに何の生れけんこのごろなれのひとみくもれり。

わがひとみすはるごとくとまりけりひいろのしゆすの帶結し兒に。

目もはるに菜の花黃ばむ高丘にみふくしもちて草つみをるも。

ゆきゆきて菜の花を見る旅まくらなみだにぬれて人をしぬびつ。

ぬく雨のふればこころの若やぎてそぞろに人のしぬばるるかな。

世をさりてとしをへにける戀人を花さく丘にしのびなくかな。

三・四・四

那覇にて

うづ高く盆にもられしおきなはのちさきばななのにほひよろしも。

葉にも根にも力みちみつこてふらんのましろの花のさきさかるかな。

四回目にここにきつればものみなは珍らしからずされどしたしき。

さく花にちりゆく花に限りなきいのちの水の泡たててゆく。

日々に老ゆる身をば思はで限りなきいのちの道にわかやぎゆかん。

爲朝の記念の亭に海を見てひるげしにけり風にふかれて。

三・四・一六

今歸仁にて

車おりて芭蕉布買ふと村に入りはた織る家を訪ひにけり。

今歸仁の手おり芭蕉布はた織りの村の女ゆ讓りうけけり。

石垣の上にすぐたつぱぱいやの實のふさなりて色づきてあり。

夕ぐれの村道くれば砂糖煮る甘きにほひの鼻をつくかな。

崎山に海見をすると手をひかれ蘇鐵あだんばのしげる坂ゆく。

三・四・一六

那覇にて

みどり葉の中に眞紅の色はゆるでいごの花の日に色はゆる。

ひとりゐて靜まりをれば萬象はなつくがごとくうづくまるかな。

三・四・一七

運天にて

崎山にのぼりてみれば海原の碧きが中にうかぶ島島。

近島の山につくれる新しき道を牛ひく人のゆく見ゆ。

常に道を求めてやまぬこころには老の白波よるすべもなし。

肉の身をすててかがやくわが前になにかはくらきかげとどむべき。

三・四・一七

那覇にて

老しらぬ若くかがやく眼の見えずすべてたらへど
さびしかりけり。（法水老師をしのびて）

罪人と共にこもれる若人の若き心にしみなつきぞ
と。

磯くさき風のふき來ぬ山かひのしげりをあるきい
きつきをれば。

年ふりし泡盛の瓶を持ちてきし人なつかしき春の
宵かな。

三・四・一八

家にかへりて

植ゑかへし鉢の楓のあかあかと芽をふくをみて涙
ぐむかな。

家にかへり墓にまうでて新しき花のささげあるを
よろこびてみる。

村人はせはしきなかをおはぎもちつくりくれけり
家にかへれば。

をのこすべて暴君なりと汝はいへりされど吾のみ
はさあらずと知れ。

三・四・二八

山遊び

山ばなの見はらしのよき松原に車座つくりさかもりするも。

酒ずきは酒をうちのみ菓子ずきは菓子をひた食ふ峯の松原。

女等は松の林をわけ入りてわらびつみつつ見えずなりけり。

とし五十二はじめてわらびぜんまいのけぢめならひて笑はれにけり。

わらび多く手ににぎりつつ女等は松原の中ゆさわぎ來にけり。

山一つ越えていでたる谷あひの若葉ふるひてもる瀬の音。

川ぞひの岩間こごしき道をゆき岩の上に咲く草花つむも。

谷川の中にひろがる岩の上に若人たちのさかもりするも。

さかだるをかつげる人の川とぶと岩にすべりて川に落ちけり。

山峡の小さきほこらの前にはにおそ山櫻咲きさかるかな。

谷間ふく風にはらはら櫻花ちるをうれしみその中に立つ。

目もはるの青葉若葉の谷あひに老いうぐひすのないてをるかな。

山峡の竹藪の中のかやぶきの家にいこひて筍食ふも。

みづみづしかきの若葉をさむ風のむごたらしくも山の端をふく。

筍のにゆるまちつつ大いなるゐろりにはじく竹におどろく。

その中のいと若き子がうたげ半ば箒枕にいねにけるかな。

都人がものめづらしく大いなるゐろりに足をいれてみるかな。

三・五・三

奥にて

きられたるあかしやの木はいやましにいきほひつよく芽ばえけるかな。

内山に男の子生れて内山はその子によりてまた生れけり。

畑つくり人形つくり小鳥かひさびしき人のいきつきてあり。

うつむきてありし蕾のけほひよくあふむきさけるけしの花かな。

あたらしくひなをかへせし十姉妹の小さきめをとのいさみをるかな。

茶をならひ三味をならひてとつくにゆける脊を待つわかき妻かな。

三・五・一九

新居濱にて

庭の内を領してたてる一本の松の大木のすぐにのびをり。

静かなる緑の雨に見いりつつ君のおもかげ偲びをるかな。

をさな子に手を引かれつつ濱に出て貝殻拾ふ五月日をあび。

天竺のしんちうのかめになげ入れしすゐいとぴいの花のいろいろ。

いけがきの上より見ゆるみどり山星夜ほのじろほととぎすなく。

蚊をいとひ蚊やり香をたき落ちしける蚊をはきあつめここちよからず。

三・五・二六

まごころ

まごころの前にひれふす人の上にたちふさがらんなにものもなし。

三・六・一

ただまことまこと心に死をこゆるくしき力も生れ來るなり。

三・六・五

信心ををろがみまつる信心に畏れなき身となりにけるかな。

眞實は廣き道なりしんじつは世の一切をいるる道なり。

せめてはもまことの人を尊みてまことなき世にそむきゆかばや。

まことなき身をはぢらひてみまことのますます高くあふがるるかな。

み佛も衆生も共に一心にこの一心にとろけぬるかな。

はばからんなにものもなく手をふりてまこと慕ひて進みゆかばや。

樂みを敢へて願はず苦しみをあへてきらはずただまごころに。

うそをいとひまことをしたひひたぶるにまことの人のみあと追ひゆく。

まことこそこよなき力まごころにたむかふあだのかげもとどめず。

さかしらに世にふるまひてときめけるまことなき人のそばによらじな。

三・六・一三

北安田の六月

閑古鳥さつき田植のまさかりの靜けき村にわたり來てなく。

ひそやかにさつきつつじのさく庭に閑古鳥のなけばさびしき。

閑古鳥ないて靜けき八つ下りお萩餅もちて村人の來る。

村はなの新宅の園にひなげしの花を見によるそぞろ歩きし。

ひなげしの花によりたちうつむきて草とる人と語りけるかな。

くれなゐの苺籠にもり紫の菖蒲の花ともたらしかな。

雨にぬれ水田上りの簑のままに村人きたるわれ見送ると。

旅に出る吾にささげんと花落ちて日立たぬ胡瓜とりてきにけり。

旅立ちの今すひてんと卵もちて村人三五來るもうれしも。

村人は吾にささげんときそひつつうまし野菜をつくりける哉。

村人のあつきなさけにつつまれて木の間の家になごみをるかな。

みまことをたたへつつふとわがむねのいつはり見えて涙するかな。

いろいろのばらの花いけその中のま白の花に師をしのびまつる。

旅のまに芍藥の花の咲いて散りなごりとどめし實のあぢきなき。

萬葉の會の夜更をほととぎす月ほのじろき庭に來てなく。

子規庭にきなければ父上にそを敎はりし日のしのばる。

道の上に落ちて光れる螢あはれ誰がいたづらにとりてすてにし。

老の故か衰への故か此頃は泣くこと多き人のなさけに。

門前のやぶに巢くへる行々子やすむひまなく夜もなきあかす。

窓近き電線につばめならびて首うごかしてさへづりをるも。

はいだるき聲して蛙のないてをる晝の田圃に藥草をつむ。

眞と僞のけぢめの線をふとくかきて生きをるわれをいとほしむかな。

南國の百姓の着る菅蓑をきて庭の內をあるき見るかな。

三・六・一四

六。東北の旅

本莊にて

城跡の青草山のあづまやに友の創作をききふける
かな。

青山に白百合のさく青山に夏來にければ白百合の
さく。

夕陽さす川邊の亭に宴してしどろに友の醉ひにけ
るかな。

その中にしなのよかりし舞女けさもおもかげ忘ら
れなくに。

心地よく醉ひてさわげる若人を見ればうれしも心
とろけて。

白ばらにそへて生けたる桃色のばらはすなほにう
つむきてあり。

友をまつひまにきけよと友は立ちて創作をよめり
青山の丘に。

閑古鳥なけば心の靜まりて茂りの下をもだしつつゆく。

城跡の青草原をあるきをれば近き木ぬれにくひななきけり。

見はるかす青田はるばる城跡に田草取る子のうたをきくかな。

三・六・一五

角間川にて

晝の間は閑古鳥きき夜になれば蛙の聲にしづみをるかな。

梅雨さむみ火鉢によりて手をぬくめ給ほししと思ひけるかな。

窓のへの鳥の羽音に朝まだき旅ねの夢の破れけるかな。

五月雨の中をくぐりて新墓の前に立ちつつ經を誦しけり。

五月雨にうすくくもれる杉森に閑古鳥しばし啼いて去りけり。

五月雨の寺にこもれば閑古鳥山鳩蛙よしきりもなく。

五月雨の墓場いゆけば新しき卒塔婆眞白にあはれなるかな。

一年もみたざるうちにたちちねに別れし君の面やつれせり。（最上義廣氏に）

婿の墓に日毎二度詣でつる人の往きけり年もへぬまに。

三・六・一九

金山にて

二十年の前のなじみの人達とあうてうれしき山かひの寺。

わが植ゑし桐のふと根の火鉢ぞとすすむる友はいまだ老いざり。

まことばかりその外何も知らぬ人をかしこしとこそ習ひたりしか。

幾萬の蛙の中にきは立ちてかじかの聲のきこえくるかな。

おやも富もなににかはせんまごころの光る世界に
すすみゆく身の。

三・六・二一

黒澤尻にて

卓上の一輪いけの紅ばらにかほをよせつつかぎに
けるかな。

旅にしてわがふるさとの燒若芽あさげにたうべな
ごみをるかな。

大岩をつらぬきやぶる白瀧の力しをりに道を求む
る。（瀧見觀音に題して）

高山ゆ曠野に落つる瀧のごと衆生をうるほさんと
思召すかな。（瀧見觀音に題して）

籠にもれる魚のかばねに息ふきて池に放たんと急
ぎまします。（魚籃觀音に題して）

靜かなるしじまの中に一切にかたる心のゆたかな
るかな。（達磨に題して）

學僧の業のけがれを清めんと二人は箒をもちてた
てるか。（寒山拾得に題して）

三・六・二三

盛岡にて

ゆきゆきて閑古鳥ききゆきゆきて櫻桃を見る初夏の旅。

三・六・二四

淨法寺にて

眼さむれば寛の水のちよろちよろと靜にきこえ窓白みあり。

この池にそだちし鱒の新しくうみし小鱒に餌をやるかな。

池の面をわたるそよ風そよそよと菖蒲の花にふいてをるかな。

青山にふし面白くなく鳥を里人ちよまとよんでをる哉。

水の上にたてる庵に冷麥をよばれてをれば閑古鳥なく。

葉櫻にゆらゆらそよぐそよ風の硝子風鈴をならしをる哉。

梅雨くものひくくさまよふ山の端に子規なく老うぐひすも。

靜なるまひるの村に高らかに七面鳥の叫びをるかな。

三・六・二六

三戸にて

べにばらのかをりよろしもわれまちて咲ける紅ばらかをりよろしも。

赤色はいつもゆかししささげらるるかあねえしよんの赤花に笑む。

三・六・二七

鮫にて

漁人らのゑびすの使とめでてをる海猫の聲に目ざめたるかな。

緣にたてば朝の海の靜かにて海猫あまたないてとびをる。

國境をもたぬ海猫この島に來て子を育て南洋に去るとふ。

三・六・二八

七。北海道の旅

湯の川にて

大いなる虎杖の葉の梅雨風にひるがへりをる蝦夷に來にけり。

しやぼてんのま赤な花が咲いてをる講壇の横にわしと並んで。

禪寺にはいればわれを迎へるといろいろの花をかざりあるかな。

村人と共に來つれば鄕遠く渡島にゐても旅とし思はず。

靴の沈むぬかるみの道を夜更けて宿にかへりぬ梅雨にぬれつつ。

七月といふに渡島は夏淺くさつきつじの花さきさかる。

湯の瀧に肩うたせつつ肉落ちし腹の皺をばつまみみるかな。

湯の瀧に身のところどころうたせつつ人をも世をも忘れをるかな。

湯をいでてしぶしぶ雨の庭あるきはるかの森の閑古鳥きく。　三・七・一

目名にて

遠つ田に蛙のきこえ近つ丘に子規きこえ月しづかなり。

あかしやの白き花ちる學校の庭の朝風さやかなるかな。

あかしやの花ちる庭をあるきつつ老鶯のさへづりきくも。　三・七・四

蘭越にて

蛙なく野道に足をとどめつつしづしづ峯にのぼる月見る。　三・七・五

狩太にて

崖道を丘にのぼれば雪のこる後志山のあらはれしかな。　三・七・六

車中

羊蹄山に殘る白雪日に光り青葉の間に見えかくれすも。　三・七・七

小樽にて

泉水にただひとつゐて鳴く蛙聲かん高く石にひびけり。

石つみて崖造りせる石の間にさつきつつじの赤くさきをり。

なつかしき男であつた奥深き光造どんは死んでいつたか。（志布志光造君の死をいたみて）

妻と別れ靜かに海邊に病んでゐた光造どんは今日世を去つた。（同上）

三・七・八

北村にて

丈にあまる蓬のしげる草原にとき色くろばの花のしるけき。

あわ立ちて水かさ増し來る石狩の河に舟うけ夕日見るかな。

夕暮の石狩河に舟うけて岸にさへづる諸鳥をきく。

うそ寒く夕風わたる舟に立ちてはるかの森の閑古鳥きく。

岸にしげる柳の枝に巣をくひて行々子鳴く河を渡りぬ。

岸の砂にまるき巣をくふ小さなる燕むれ飛ぶ河の上かな。

河沿の青草原に愛らしき小馬を連れて女馬草くふ。

河沿の柳のかげにさくさくと馬の草くふ音なつかしむ。

ぱあぱあと言うて草くふ馬のそばに寄りて顔をばなでてやるかな。

舟を出でて砂原來れば香の高き紅色ばらの花落ちてあり。

河沿の野道を歩き野に遊ぶ羊の群をながめけるかな。

野の中の寺の畑にぐすべりのまだ青き實を取りてくひけり。

たはむれにぐすべり取りて喰ひをれば白き小犬の
ざれて寄り來る。

珍らしみれつどすぐりの枝折りて夕げの室に歸り
來にけり。

道ばたの豌豆の畑に水をやる村の若人ともものを言
ひけり。

案内せる村の若人が畑に入りてびいと扱ぎ來て見
せにけるかな。

御代なれや北國に來てなまなましぱいんあつぷる
をもてなされけり。

三・七・一〇

旭川にて

あいぬ地に熊を見に行き神まつる木ぬれの幣を求
め來にけり。

死に人の枕邊にかけてまつるてふあいぬの衣の繡
おもしろき。

はらはらと音たててけしの花散りぬまひるの室の
しじまやぶりて。

どんぐりの大樹の森をさすらひて眞夏涼しき風を
すふかな。（上川神社にて）

失せし子の事を語りてはらはらと四十男の泣きに
けるかな。（木原儀一氏に）

失せし子を語りて泣ける人を見て尊く思ひ念佛す
るかな。　三・七・一三

訪へばおさへきれざる喜びに立ちつゐつしてむか
へましけり。（願成寺にて）

しをれたる芥子にかへたる睡蓮の花もしぼみてけ
ふも日の入る。（慶誠寺にて）　三・七・一四

床の間の水盤に生けし睡蓮の花開きけり朝さやか
に。

白々と陽の照る室に火を入れし桐の火鉢の置かれ
あるかな。

ただひとつうそを言はない事一つそれが出來たら
佛になれる。

よき子うみてよきたらちねとなれよかしさくらん
ぼうのやうによき子を。（万仲君のお二人に）　三・七・一五

睡蓮十首

睡蓮の池をめぐりてひんがしの山にでる日をまち
てをるかな。

あさまだき汐湯をいでて公園の睡蓮の花を見にま
はりけり。

庭前の鉢に植ゑたる睡蓮のただひとつさく花いと
ほしむ。

白鳥と睡蓮と石にきざみあり古き印度ののみのあ
とかな。

月見草の花見にゆけば睡蓮はそむくがごとくみな
しぼみあり。

睡蓮をかけば殊更ときいろの花のみかける畫人あ
りけり。

法衣ぬぎて僧達の泳ぐ池のあさ睡蓮の花のさきに
けるかな。

古のえじぷと人の石にほりし車輪のごとき睡蓮の花。

小むすめに手をとられつつ泉水の橋にしやがみて睡蓮を見る。

睡蓮の黄なる蕊はもあつき日にとけひらきをる黄なる蕊はも。（旭川歌會）

三・七・一五

帯廣にて

ひたぶるに雨ふりければ狩勝の峠こえつつただ雨を見る。

横ざまにけほひするどく大つぶの大陸らしき雨のふるかな。

見はるかす大青原のあちらこちら梅雨雲ひくくくまうてをるかな。

青草の山のすべりをうねりうねり立ち燒けの木をあかず見て來し。

三・七・一六

札幌にて

ひろびろと青草しげる庭の奥に楡の大樹の雨にけむれり。

大いなる楡の木をふく涼風にふかれて君を偲びけるかな。（上田武次君に）

三・七・一七

磯谷にて

とんねるを出でて海邊の岩角に沖に入る日をながめつるかな。

川沿の山すその道をさすらひていろいろの草の葉をつみしかな。

川沿の山道來れば數多き鶯鳴けり聲さまざまに。

道の邊のひくき木ぬれに鶯の飛びつつ鳴くを妹の見出でぬ。

川風のさとふき入れば肌さむくま夏をねるの羽織着るかな。

大川に沿うて流るる山脈のあちこちの木に鶯の鳴く。

三・七・一九

鶯のあちこちの山に數しれず奇しきこうらすをうたひをるかな。

銀色に光る海原あとにして磯谷の里をたちにけるかな。

とんねるを出ればにはかに尻別の川風ふいて汗のひきけり。

三・七・二〇

八。樺太の旅

大泊にて

鱒とるを見にゆきながら船にはねる鱒に面をそむけけるかな。

ぱちぱちとはねをる鱒を舟子らはむごたらしくもうち殺しけり。

うたれたる鱒はあぎとに赤き血を流して船に横はりをり。

ますあみについてあがりしおそろしきいばら大蟹
泡をふきをる。

甲板の板におかれし大蟹はもだゆるごとく動きを
るかな。

あてどなく十本の足を動かしてもだゆる蟹をあは
れみをるも。

本堂のうしろの山にちよろちよろとわき出る水を
むすびのみけり。

ふるさとの思ひ出にうつしうゑしてふ芍薬の花の
さいてをるかな。

大工らがお祭せしと太子堂の前にいろいろの旗の
たてあり。

久に逢へる我が里人は我を見てものをもいはずた
だないてあり。

涙して迎ふる人に胸せまりただうつむきていらへ
せるかな。

そよそよと涼風かよふ山の家の廣間にすわり海を見るかな。

三・七・二三

豐原にて

高丘にやしろしつらひ神向ひこの新國をひらくはらから。

白樺と落葉松の並木道すぐにひろびろ御社に入る。

あかがねの鳥居くぐれば敷石の廣道遠く殿に通へり。

砲彈に打くだかれし敵艦の煙突たてり青草原に。

あすはるとしきたる街にゆきかへる馬車の鈴の音ひびき居るかな。

みやしろに詣でて來ればとど松の森のあなたに閑古鳥鳴く。

三・七・二四

知取へ行く途中

草原に黑百合あまた咲くといへど我には見えず汽車ひた走る。

山焼けに焼けたる木ぞと青原に骨の如くに木のたてるかな。

白くされし大木材のみはるかす海一面にちらばりをるも。

草原にたふれしままの大木の眞白く雨にされてをるかな。

立枯の林さみしき山焼けのあとともしきけばなほもさびしき。

ひる過ぎの暑さ烈しくめづらしくうはぎをぬぎてすずみけるかな。

わぎもことかたらふ夢のさめぬれば身は樺太の汽車の中にあり。

名も知らぬ眞白の花は青草の原一面に咲いてをるかな。

とど松の林の中に立枯の赤きがまざりあはれなるかな。

たふるればたふれしままに太き木を山にすてあり
人の手ふれず。

山燒けのあとに殘れるとど松の數里にわたる林過
ぎ行く。

山越えて海邊に來れば波なぎて魚取る舟ものどか
なるかな。

磯近く旗ひるがへりこんぶとる舟葉の如く沖にち
らばる。

ぱんを賣るすらぶにものの言ひたさにいらざるぱ
んを買ひにけるかな。

すらぶより買ひたるぱんを學校ゆかへる子供にや
りにけるかな。

長き汽車のうさまぎらすときたなげのうどんくひ
けりまどに首出し。

箱につめ砂糖をそへたる新しきいちご買ひけり汽
車の窓より。

濱なすの花美しく咲いてあり丸木ちらばる青草原に。

白樺のみき白々とかがやける林を縫うて汽車は走れり。

山かひの草の中ゆく川にそひ丸木横にしたてる小屋あり。

濱近き白樺の森に小さき鳥の可愛ゆき聲に囀りをるも。

海近きとど松山のすみがまに炭燒く煙たつてをるかな。

いたどりの花咲き盛る北國の海邊の夏の榮えを見せをり。

さらさらと磯打つ波の音淋し夏も夕日の風のつめたく。

三・七・二五

知取にて

本船に通ふはしけに外套の襟たててたつ風寒ければ。

さほど風のあるとも見えぬに我のれるもーたぼー
とはゆれにゆれけり。

三・七・二六

新問にて

磯近く追ひ寄せてきし大波のはしけの内にをどり
入りけり。

舟の中にをどり入りける大波に人と荷物のぬれに
けるかな。

宿に入り眞裸になり汐にぬれしきぬをあらひてほ
しもらひけり。

三・七・二六

泊岸にて

日の本の北のはてなる樺太の汽車もかよはぬ村に
來にけり。

たはむれにまるまげにゆひし小娘の顏みつむれば
そむけたるかな。

濱による小舟の中に白々と鱒勇ましくはねてをる
かな。

舟はみえずあさぎりの中に鱒網をくれる拍子の聲
のみ聞ゆ。